

き、Proceeding の編集をしている。

1970年代からの日本の大望遠計画の議論では、海外設置の必要性を強く主張した少数派の一人である。東大教授に昇任したのは遅かったが、1988年に東京天文台を定年退職してから、東海大学文明研究所の教授を勤めていたはずである。

寿岳さんは長く病床にあり、身体は自由には動

かせなくても、頭脳は常に明晰で、天文の新刊論文に常に目を通してのには、感心していた。

生真面目で正義感が強く、東京天文台主流派の人たちと対立することが多かったが、天文学の学識は抜群で、独自の道を歩んだ寿岳さんを失ったことは、非常に残念である。

寿岳さんの思い出

近藤雅之 (元東京天文台)

松島 訓さんが渡米したのは新聞で見た。寿岳さんのことは畑中先生の雑談ではじめてきいた。お顔を見たのは帰国して基研に入り年会で講演したときである。日本での学位論文をPASJに投稿されたとき図は綺麗な鉛筆書きであったので、文句を言う人がいた。畑中武夫先生が寿岳君はちゃんとしたのを送ってくるよといったが次の日にすごい立派な墨入れの図が届いた。寿岳さんが東京に移ったときはAller先生の推薦状があった。大沢清輝先生が見てご覧と渡してくれた手紙に、教えた学生で1番はChamberlain, 2番はLiller, 3番がJugakuと書いてあった。

寿岳さんはわたしの隣に座っていたのでいろいろな話を聞く機会があった。はなしのなかの形容詞に数値がつく。向こうから来る80%美人とか、それは π だけあやしいとかである。わたしが一番好きだったのはSargent とした3 Cen Aの ^3He

だが実際に仕事をみていたのはCayrel-Jugakuの計算であった。タイガーをまわしてレポート用紙何冊分かを細かい字で埋めていた。

PASJの編集はそのあとだがレフリー選びも校正も、郵便の発送もやっていた。自費で2台もIBMのタイプライターを買っていた、学会は貧乏だったから。日本語のレポートは全部書き写してレフリーが誰かわからないようにしていた。よく著者と対面で文章を検討していた。息抜きに私の部屋で名前抜きで週刊ゴシップを聞かせてくれたことも多い。

岡山の公開が始まる前、京都の年会のとき斎藤澄三郎さん、上杉 明さんと4人で話したことがあった。上杉さんは公開というのに悲観的な見方だったが、寿岳さんは東京方としてそんなことはないと一所懸命話していた。思えば3人とも亡くなってしまって寂しいことである。